

令和元年6月28日現在

機関番号：34320

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13155

研究課題名(和文)南インドのヴェーダ儀軌「チャダンガ」の基礎的研究：古代と現代を結ぶ新領域の開拓

研究課題名(英文)Manuals of the Vedic Rituals in South India Called "Catannus"

研究代表者

手嶋 英貴 (Teshima, Hideki)

京都文教大学・総合社会学部・教授

研究者番号：30388178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)現地で2017年に自家印刷された『パウダーヤナ・チャダンガ』を入手し、その中の「アグニホートラ章」をローマ字転写するとともに、日本語訳を作成した。(2)マラーヤラム語によるチャダンガ読解に必要な基礎資料となる「チャダンガ読解用文法・表現マニュアル」および「マラーヤラム語ヴェーダ祭式語彙集」を作成し、連携研究者らと共有した。(3)実際に挙行されたアグニホートラ祭をビデオ撮影し、シュラウタースートラおよびチャダンガの記述と比較できるようになった。なお調査期間の最終段階では、リグヴェーダ派師匠家の一つにおいて、学界未知のヴェーダ文献の古写本群(パームリーフ)を発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中近世に成立したチャダンガは、古代ヴェーダ文献と現代のヴェーダ祭式とを結ぶ歴史上の「結節点」をなす。本研究を通じてこの文献の実態が初めて明らかになり、古代から中世にかけて生じたヴェーダ祭式(現段階では特にアグニホートラ祭)の変化をたどることが出来るようになった。近年の急速なグローバル化への反動もあり、現代インドでは自国文化の源と言えるヴェーダ祭式への関心が高まっている。そして当のヴェーダ祭式は、チャダンガという地方語文献によってケーララで幅広く受容されることで断絶の危機を乗り越えてきた。本研究は、その歴史を明らかにし、インド国民のアイデンティティ形成の一端を理解することを助けるものである。

研究成果の概要(英文)：(1) The text of Agnihotra part in a private print of the Baudhayana-Catannu in Malayalam, which was issued by Brahmins in Kerala (2017), was transliterated in Roman script and translated in Japanese for publishing. (2) New materials for investigation, such as a glossary of Malayalam ritual terms, manuals on grammar and style of the Catannu texts, are made and shared among related scholars. (3) An Agnihotra ritual performed in Kerala was recorded in a movie in order to compare it with the description in the Sruta-Sutra and Catannu. At the end of the present project, we discovered over 60 old granthas of vedic ritual texts, which were never acknowledged by any scholar, conserved in a Brahmin house, and it is expected that they contain new valuable source(s) for our interest.

研究分野：インド宗教文化史

キーワード：シュラウタ グリヒヤ ケーララ マラーヤラム アグニ ブラーフマナ 祭主

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

南インドのケーララ州は、ヴェーダ祭式が生きた形で残っていることで知られる。家庭で行われるグリヒャ祭のみならず、アグニチャヤナ祭(火壇建造祭)など複雑な過程を持つシュラウタ祭も挙行され続けている。ただし、その挙行マニュアルとして古代サンスクリットの祭式文献が直接用いられる訳ではなく、実際には「チャダンガ」(catannu「祭事」の意、16~18世紀頃に成立)とよばれるマラーラム語の儀軌が参照される。チャダンガは、古代の祭式文献に規定される挙行手続きを解説したもののだが、その細部には独自の要素も含まれる。各ヴェーダ学派はグリヒャ、シュラウタ双方に固有のチャダンガを備え、それに基づいて祭式を行っている。従って、現代のヴェーダ祭式を理解するために、チャダンガ文献の研究は不可欠だと言える。

ところが、その読解にはヴェーダ祭式の知識とサンスクリット、マラーラム双方にまたがる文献読解力が要求されることもあり、これまで本格的なチャダンガ研究はほとんど行われてこなかった。現地には四種のチャダンガ刊本があるが、いずれも家庭祭を扱う「グリヒャ・チャダンガ」に限られる。また先行研究としては、ジャイミニヤ派のグリヒャ・チャダンガを同派のグリヒャ・スートラと比較した Asko Parpola “Codification of Vedic domestic ritual in Kerala”. *Travaux de symposium international: le livre, la Roumanie, l'Europe* (2011 Bucarest), pp.261-354 が、目下唯一のものである。そして特に留意すべきは、ヴェーダ研究において最も重要な位置を占めるシュラウタ祭のチャダンガが未公開であり、かつそれを対象とする学術研究も存在しないことである。

こうした状況を踏まえ、研究代表者である手嶋は 2009 年以降、現地でヴェーダ文献写本の収集・調査を行うとともに、チャダンガ写本を所有する複数のブラーミン家系と密接な関係を築いてきた。また専門のサンスクリットに加えマラーラム語も継続的に学習し、チャダンガ読解に必要な能力の獲得に努めてきた。

### 2. 研究の目的

上述のアドヴァンテージを生かし、本研究ではまずシュラウタ、グリヒャ双方にわたるチャダンガ写本を写真画像として収集し、テキストデータ化する。同時に、チャダンガに則って行われるヴェーダ祭式の様子もビデオ撮影する。さらに、新資料を用いて学界初となる「シュラウタ・チャダンガ校訂テキスト」の作成に着手する。とくに本研究期間では、最も基本的なシュラウタ祭であるアグニホートラ祭の部分について、校訂テキストを完成させることを目標とする。

従来のヴェーダ研究では、古代の言語や文化・社会の解明に力が注がれる半面、その成果を現代的現象への洞察に活かす道が十分に拓かれてこなかった。本研究は、チャダンガを学術的調査の対象とすることで、上述の課題に応える新たな研究領域を開こうとする点に特色がある。近年の急速なグローバル化への反動もあり、現代インドでは自国文化の源と言えるヴェーダ祭式への関心が高まっている。一般市民の喜捨が追い風となり、祭式の挙行も増加傾向にある。こうした「ヴェーダ復興」という事象の根底には、ケーララの祭式伝承が、チャダンガという地方語テキストに再編されたことで広く受容され、その基盤の厚みによって断絶の危機を乗り越えてきた歴史がある。チャダンガ研究は最終的に、世界最古の宗教伝統を今日まで生命あるものとした、注目すべき「文化システム」の構造を理解することに繋がる。

### 3. 研究の方法

中近世に成立したチャダンガは、古代ヴェーダ文献と現代のヴェーダ祭式とを結び、いわば歴史上の「結節点」をなしている。本研究では、今まで空白となってきたこの文献領域の実態を初めて明らかにするため、以下の方法をとる。まずシュラウタ・スートラ、グリヒャ・スートラといった「ヴェーダ祭式文献」とチャダンガとを比較することにより、古代から中世にかけて生じたヴェーダ祭式の形態変化を具体的なレベルで確認することが出来る。次に、チャダンガの記述を実際に行われる祭式と照合することで、前者の記述内容を明確に理解するとともに、近代以降に生じた変化(例えば動物犠牲を代替する手続きなど)を知ることが出来る。

本研究の推進にあたっては、インドを対象とする諸学問分野の研究者とも積極的に連携していく。例えば、「シュラウタ・チャダンガ」校訂テキストの作成においては、記述内容(祭式)の理解だけでなく、その言語的側面にも注目する。マラーラム語はドラヴィダ系諸語の中でも特にサンスクリット由来の語彙を豊かに持つものであり、チャダンガは同語の生成過程を探るための重要資料でもある。こうした視点から言語学、文学の専門家とともにチャダンガ文献のもつ意義を検討する。さらに、チャダンガ写本を所蔵するブラーミン家系を中心として、ヴェーダ伝承とそれを保持するブラーミン集団がもつ「現代的意義」を探る現地調査を進める。さらに、その成果を社会学や人類学の研究者と共有することで、現代インド社会に対する理解の深化へと繋げていく。

### 4. 研究成果

(1) 古写本および現地印行物の収集: パームリーフの束を木製のバインダーで綴じた「グラント」と呼ばれる古写本を、ヤジュル・ヴェーダ系ヴァードゥーラ派、パウダーヤナ派の諸家で 8 点写真撮影した。内容はアグニホートラ祭を中心とするシュラウタ祭式の執行方法を述べ

たチャダンガである。また、リグ・ヴェーダ系カウシータカ派の複数の家では、グラントから紙製のノートブック(おそらく20世紀前半のもの)に手書きされたチャダンガの写しを撮影した。そこには、アグニホートラ・チャダンガのほか、ソーマ祭やアグニチャヤナ祭といった大規模祭式の式次第を述べる大部のチャダンガが含まれている。なお調査期間の最終段階では、カウシータカ派の師匠家の一つにおいて、学界未知のヴェーダ文献の古写本群(パームリーフ)を発見した。写真撮影、内容調査はこれからとなるが、文書収集や学術調査の対象となった形跡は皆無であり、新出の重要写本を含んでいる可能性がある。さらに調査期間中、パウダーヤナ派の師匠家の一つで、『パウダーヤナ・チャダンガ』が自家製本の形で印行されたため、同家を訪ねて入手した。本課題の主な研究対象であるアグニホートラ祭を扱った章も含まれている。印行されたテキストは古写本に基づくが、現在の師匠格伝承者たちによる校訂を経たものという。こうして、印字されたテキストを一つ持ちえたことは、様々な手書き写本を解読していく上で大いに役立つ。

(2)「アグニホートラ・チャダンガ」研究のための基礎資料の整備：本研究の主眼である「アグニホートラ・チャダンガ」の校訂テキスト作成のためには、文献の言語的理解を助ける基礎資料が欠かせない。チャダンガのマラーヤラム語は、現代で一般的な語句・表現とはしばしば大きく異なっている。特に、祭具など特殊な事物の名称や、祭官が行う所作の表現などは、通常の辞書にないことが多い。一般的な辞書等を参照しても、解決できないことが非常に多い。そこで独自に、チャダンガで多用される表現を事項別にまとめた「チャダンガ文法マニュアル」および「マラーヤラム語ヴェーダ祭式語彙集」を作成した。これにより原文の読解を効率的に進められるようになった。

(3)現代ヴェーダ祭式のビデオ撮影：パウダーヤナ派宗家の一つであるカイクムック家(コダカラ村)にて満月祭の全過程をビデオ撮影した。また、カウシータカ派のプッティラム家とパウダーヤナ派のパンタル家で、グリヒヤ祭としての満月祭であるスターリーパーカ祭を撮影した。さらにカウシータカ派のプッティラム家では、本研究の主な調査対象であるアグニホートラ祭を撮影し、シュラウタ・スートラおよびチャダンガの記述を、実際に举行されている祭式と比較できるようになった。

(4)諸資料の比較研究における成果：古代文献であるシュラウタ・スートラと中近世のチャダンガとは、同じヴェーダ祭式の儀軌ではあるが、その性格面でいくつかの違いが見られる。まず、スートラ文献は語句の改変が認められない、いわゆる「クローズド・キャンオン」だが、チャダンガは、同じ祭式を扱いながらも、流派、家系、さらには個人ごとに記述方法がいくらか異なる。しかし、そこに記述されるマントラや儀礼的所作そのものはおおむね共通する。特にスートラが規定する基幹的要素はほぼ必ず含まれている。「オープン・キャンオン」といえるほど自由に記述されるわけではないが、スートラに比べれば、実用性に鑑みて表現方法を変える余地がずっと大きいと思われる。

いっぽう、チャダンガはスートラ文献よりも、むしろ中世以降にサンスクリット語で編まれたプラヨーガ文献(スートラの補遺文献)に近いように見える。つまり、入門者が先達から手ほどきを受けることを前提に、それを正しく再現するために必要な範囲でのマニュアルである。従って、スートラのように全ての所作やマントラを細かく示すのではなく、簡潔に粗筋を述べていくスタイルが取られる。ただしチャダンガは、オリジナルのヴェーダ規定にないヒンドゥー儀礼的な要素をも記述している。また、本来の複雑な手続きを、慣例的に簡略な所作で代替する「サンカルパ」(みなし)と呼ばれる行為もそのまま規定として示される。こうした非ヴェーダ的要素が、歴史上のどの段階で生じたかを探ることが、今後の課題となる。

目下こうしたスートラ文献との比較をベースにして、パウダーヤナ派「アグニホートラ・チャダンガ」の原文・和訳を紹介し、解説する論考を作成しつつある。ここでは、マラーヤラム語文法の詳細な注記を載せ、同時に「パウダーヤナ・シュラウタ・スートラ」における対応個所の原典と和訳も示している。これにより、チャダンガの記述内容を理解するだけでなく、スートラ段階からの変更点を具体的に知ることができる。さらに現地で撮影したアグニホートラ祭の映像を研究資料用に編集している。ここでは、チャダンガの原文・和訳に付された通し番号と見出しを映像の対応個所に挿入するなど、上述の論考と比較参照できるよう工夫している。

(5)研究成果の共有

2018年6月に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が主催する海外学術調査フェスタのポスター発表に参加した。「南インドのヴェーダ儀軌「チャダンガ」の基礎的研究：古代と現代を結ぶ新領域の開拓」と題し、上述の研究成果を大判ポスターにまとめ、来場者に関覧してもらった。小型モニターで現代のヴェーダ祭式の映像を紹介したこともあり、多様な専門分野の研究者から内容について10件ほど質問が寄せられた。

さらに2018年9月には、日本印度学仏教学会学術大会パネル部会「現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス：ケーララ州の事例から探る」(代表者・手嶋英貴)を開催した。手嶋自身は、「ヴェーダ伝承者たちと儀軌文献：祭式を維持する文化的・社会的基盤」と題する報告を行った。ここでは、アグニホートラ祭の一部を「チャダンガの記述」「スートラの記述」「現代の举行映像」という三つの資料から紹介し、三者相互の違いを検討した。それを通じて、従来ほぼ未知の存在であったチャダンガ文献が、現代のヴェーダ祭式のあり方を決定づけていることを明らかにした。今後チャダンガの研究を推進することの意義が、多くの研究者に理解される機会となった。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計2件)

手嶋英貴,「現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス: ケーララ州の事例から探る」(パネル報告),『印度學仏教学研究』, 67-2: 809 (234)-808 (235), 2019.

[https://researchmap.jp/?action=cv\\_download\\_main&upload\\_id=250754](https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=250754)

手嶋英貴,「ケーララ州のヒンドゥー寺院司祭・タントリ: その職務と家系、ヴェーダ伝承との関わり」,『人文學報』(京都大学人文科学研究所), 110: 121-147, 2017.

[https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231123/1/110\\_121.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231123/1/110_121.pdf)

### 〔学会発表〕(計3件)

手嶋英貴,「ヴェーダ伝承者たちと儀軌文献 —祭式を維持する文化的・社会的基盤」,日本印度学仏教学会学会学術大会パネル「現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス —ケーララ州の事例から探る」, 2018.

TESHIMA Hideki, “Human Relations and Vernacular Texts Sustaining the Vedic Rituals in Kerala.” Lecture at l’Institut Français de Pondichéry, 2018.

手嶋英貴,「南インドのヴェーダ儀軌「チャダンガ」の基礎的研究: 古代と現代を結ぶ新領域の開拓」, 海外学術調査フェスタ(主催: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 2018.

### 〔図書〕(計2件)

TESHIMA Hideki, “Variations of the Vedic Unit *Prakrama* (Step): Applied for Measuring Length at Ritual Sites.” In: *Rituals, Mathematics and Astral Sciences* (Husson, Keller, Sho eds.), in WSAWM (“Why the Sciences of the Ancient World Matter”) Series, Berlin: Springer, 2020 (印刷中).

手嶋英貴,「ヴェーダ祭式の伝統」,『インド文化事典』, 東京: 丸善出版, 2018, 236-237.

### 〔産業財産権〕

#### ○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

#### ○取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

### 〔その他〕

ホームページ等

[https://www.kbu.ac.jp/kbu/reseach\\_ex/pdf/h29teshima.pdf](https://www.kbu.ac.jp/kbu/reseach_ex/pdf/h29teshima.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 連携研究者

連携研究者氏名: 藤井 正人

ローマ字氏名: FUJII Masato

所属研究機関名: 京都大学

部局名: 人文科学研究所

職名: 教授

研究者番号(8桁): 50183926

(2)連携研究者

連携研究者氏名：梶原 三恵子

ローマ字氏名：KAJIHARA Mieko

所属研究機関名：東京大学

部局名：人文社会系研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 00456774

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。